

# 玩物讚志（歴代書論と私の清玩）①

日賀野 琢

Taku Higano

書作品制作における用具用材の選定は、作品の成否に大きな影響を及ぼすが、作品そのものの個性と同様、作者の趣味や好み、書に対する理念を如実に反映するものである。

明窓浄几、筆硯紙墨、皆極精良、亦自是人生一樂。（蘇舜欽語・歐陽脩『試筆』）

まさに文人趣味の理想境地であるが、必ずしも高価・精良でなくとも、自らの資質にフィットし、常日頃安心安定して使いこなせる用具用材をチョイスするという姿勢が最も大切であろう。

\*

\*

## 〔筆〕

筆若適士大夫意、則工書人不能用。（蘇軾『東坡題跋』卷五「書具說筆」）（筆若し士大夫の意に適わざれば、則ち書に工みなる人も用うることをせず。）

名家蘇軾も時の名製筆工呉政の子、呉説の筆を愛用した。この「適

意」という観点に大きく頷くものである。私は現在、最も意に適った安価な羊毛筆を数年来、数種使い分けている。同じ銘柄の筆であっても微妙な個体差が生じるため、試筆を繰り返して、状態がベストなものを残している。使用後洗って乾燥させたものよりも、含墨させたままガラス筆立に差して置き使用することが多い。筆に適度なコシを与えるためである。

良工先利其刀、能書必用好筆。刻鏤隨用改刀、臨池逐字易筆。（空海『性靈集』巻第四「春宮献筆啓」）（良工は先ず其の刀を利くし、能書は必ず好筆を用う。刻鏤には用に随って刀を改め、臨池には字に逐って筆を易う。）

筆は適材適所、やはりよく吟味選別しなければならない。俗諺「弘法筆をえらばず」と謳われる空海が述べた言葉としては興味深い。私の場合、どの書体を書こうとも、選んだ筆に頼りきっているのが現状である。

## 【墨】

夫墨者黝而已矣。堅其德也。色澤其華也。（汪道貫語・方于魯『方氏墨譜』「墨書」）  
（夫れ墨は黝にして已る。堅きは其の徳なり。色澤は其の華なり。）

現在の私の墨色の好みはこの「黝」（「設文」黝、微青黒色、从黒幼聲）である。俗に松煙系は青黒く、油煙系は紫黒色といわれるが、「墨に五彩あり」、青Ⅱ蒼、紫Ⅱ紫紺に近いものを好む。今は横着して市販の墨液を多用しているが、樹脂系の純黒墨液に青系の墨液をミックスして好みの色を作り上げている。以前は黒七青三程度の割合だったが、最近では黒五青五の割合になっている。これは現在使用するようになった紙の質を考慮してのものであるが、書き終わった後の乾燥調整、俗に行う「吸い取り」の作業が制作時の湿度環境にもかなり左右されるため、幾度か試行錯誤した結果、現在の私のベストな調合率でもある。

また、

墨欲至實、實則烟沈。墨欲至虛、虛則質清。實々虚々、既沈復清。是曰墨神。（邢侗「墨談」語・程君房『程氏墨苑』卷六下）  
（墨は至実ならんことを欲す。実なれば烟、沈なり。墨は至虚ならんことを欲す。虚なれば質、清なり。実々虚々、既に沈また清なり。是れを墨神と曰う。）

という理想を常に念願している。書の第一義的な「線」の充実を図るには、やはり自分に見合った墨の選定が鍵となる。切れば血が迸るように沈着し、叩けば快音を響かせるような清々しい線が引けることを絶えず心掛けなければならない。

書必有神、氣、骨、肉、血。五者闕一、不為成書也。（蘇軾『東坡題跋』卷四「論書」）  
（書には必ず神、氣、骨、肉、血有り。五者一を闕けば成書と為さざるなり）  
の如く、生きた人間同様、書における墨は、まさに肉であり血なのである。

\*

\*

## 【掲出作品】

### ●題名

『張謂詩・同諸公遊雲公禪寺』

### ●釈文

看花尋徑遠。聽鳥入林迷。

### ●用具・用材

墨・・・和墨（黒系濃墨に青墨を混入）  
筆・・・純白羊毫（五号程度）

紙・・・泰国産画箋（中厚）

●寸法

タテ八一cm×ヨコ八一cm

●制作年月

二〇一三年十一月

第九回淇水書展（東京銀座画廊・美術館 二〇一四年一月）発表



81×81

看花尋徑遠。  
聽鳥入林迷。